

洞窟を抜ける秘境・・

★猪名川水系一庫ダム大路次川インレット
☆龍化隧道インレット～龍化渓谷

「つわあつー・・洞窟やー」

「ホンマヤー・・洞窟やー」

「つわあつー・・」とさるべるやー」

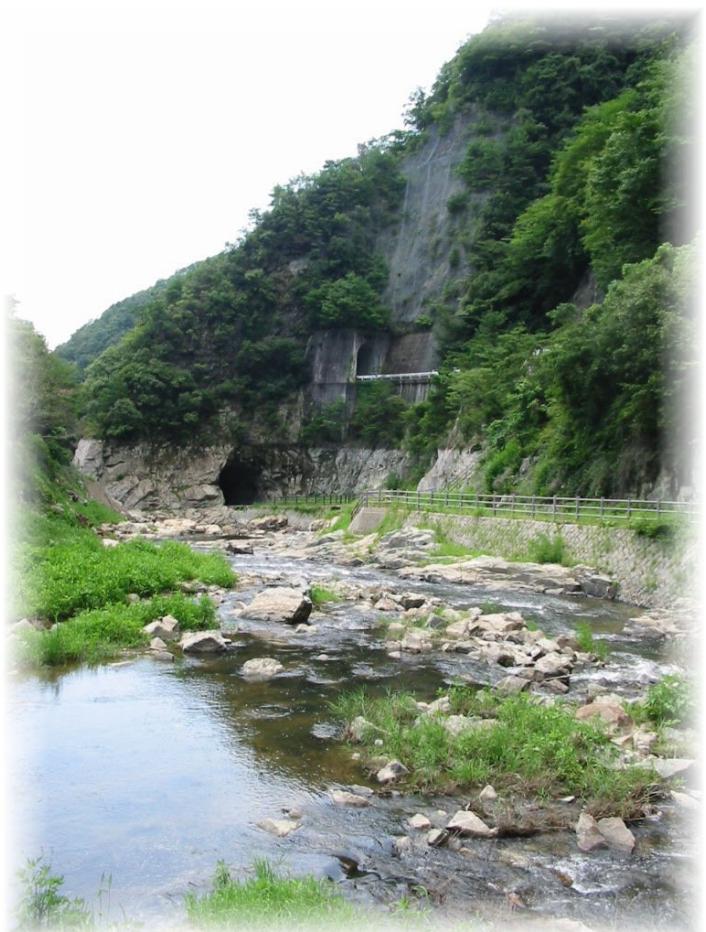
「ホンマヤー・・」とさるべるやー」

後部座席で興奮する小学校3年生と年長組の弟をよそい、親父はやっくことお話を胸に貯めてだけの短い一行を抜けた。

「・・龍化隧道やて、こつ頃でせんだんやろ・・すいこね・・」と助手席のお袋がつぶやいた。「わあ～なあ～・・こつやか～・・しかじーの道は細いし曲がりくねっとむからカナンなあ」と親父がほやく・・

もう40年近く前の・・とある日曜日・・
持麈のマイカー「ペーベル」が来て嬉しくてたまりず、「アリイド」が?・・と渓谷沿いの側道を走向車が来ないことを祈しながら上がって行った。

今は「アリイド」と叫ぶ葉も聞けないが、この頃はもつとも興奮する「五斗が十」だった。この由さざいを口説いていたのかも記憶にならぬが、一家4人では車が非力で隧道を穿き切れず、弓矢返して来たのを覚えている。



の気に入りになった。
今はすっかりダムに流み記憶の片隅にしか残っていないが、今でもこの渓谷は心の奥底で美しく流れている。

記憶が正しければ洞窟と呼ばれた「龍化隧道」ともうひとつお団子の「五斗隧道?」

があつたと思つ。
私にとってこの辺には三度はなく深だつた。

ある程度釣りがわから始めるとモチモチが趣味

で釣りは適度に知つてこの程度の親父の手解きでは満足できず、少年向けの釣り仕掛け集を買ってやった。この手の本はわかるやすく様に魚の名前をこいつえお順に並んでいた。

一番最初に登場する魚は「船魚」だった。やべーじには船魚とヤマメが描いてあり、脈釣りの仕掛けが紹介されていた。

オイカワが住む中流域には生息でややカワツツが生息する流域よりも更に上流に生息し、溪流魚と呼ばれてくる。里山の様に美しく中でも観が美しい大路次川だった。

フナ釣りの棒浮きとは違ひ、唐辛子浮きで歩きながら竿を出す三釣りは樂しく、直ぐに一番

「あの洞窟を抜けたらどんな上流に行つたうか

るんとちやうか？・・ドライブ行ったとか途中で川が道から分かれただけ・・あれどんとん言つたいうおるとちやうか？」
「つかさと・・・と語つ少年の想ひはダラに沈んだ大路次川とともにいつしかいかに消えさせていた。

■猪名川一庫ダム龍化隧道インレットの「案内」あれだけ秘境を感じていた旧龍化隧道は今では夏の時期にだけ湖底から姿を現す、まことに「洞窟」になってしまい、真夏のドピーカンで唯一釣りが成立するケタバスの近場のポイントとして重宝している。

ダムが出来て側道も高く上がり、直ぐ上にコンクリートの新龍化隧道があり、少し上手に吊橋もある。

今でもこの辺りは昔の面影が残る渓谷美を残しており、十年前はよく子供を連れてテイキヤンプに行つた。子供とカレーを作つた後は水辺で遊ぶ子供を見ながらフライロッドを振つていた。

ある年の五月の連休にいつものようにトイキヤンプに行くと、九州から来た男がタープを張つてキャンプをしていて。

(なんも・・九州からわざわざ来てキ

ヤンプするといふやないでえー)と思つたが、トーブルにはさあやのロードが立てかけてある。私のトーブルを覗くと・・・「この辺にあります?」

「いやあ、この辺におまけは釣れます?」
やつたうダムの流れ込みでバスですか・・・かよつと早じけど・・・

「この辺に・・・ガバ釣れやつて見えるやないですか?・・・おうんどですか?」・・・と結構、霧雨氣が気に入つてゐるらしい。

「霧雨氣だけはヒサギね・・・溪流魚はおりまへん!」

そのぐらゝ、溪流魚がいなくとも溪流釣りの霧雨氣を味わえる渓谷である。

ケタバスは真夏のダムから選上した魚がインレットに集まり一度洞窟の前から少し上流の吊橋までがポイントになら。

ルアーではスプーンやスピナード簡単に釣れたが、フライで釣ると、釣れることは釣れてもルアーと違い、今ひとつ決め手がなかつた。
結局、ケタバスもハス(=オイカワ)のツッカイのと思えばわかりやすい。

ダムにいる時はストリーマーが有効だが、川に遡ると虫も食つてしる。釣り方は溪魚と道具立ては全く同じでよいが、この魚は毛鉤を流しても余り効果がない、大半は着水と同時にヒットするオイカワそのものである。

「これがわかると結構簡単に釣れまくつてくれ、サイズもそこそこの真夏のドピーカンでも全く問題なく、2時間程の片手間の釣りにはもっていこである。

吹橋より上流はよくトイキヤンプをしてた所で溪相もすばりしい。

聞くと「あれ? なに?」が昨年から「一庫大路次川自然渓流釣場」としておまじと虹鱒を放流する管理釣り場となつたらしい。
オフシーズンと云ふ、他の洞窟を抜ける秘境でおまじが釣れる・・・大路次川龍化渓谷・・・
近く、訪れたこと思つてこら。

2006年 12月

